様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　５月１５日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８５２０３８２
研究課題名（和文）
コーパスを用いた押韻俗語表現の音韻的反復とテクストにおける語句反復に関する研究
研究課題名（英文）
Corpus-Based Studies in Rhyming Slang and Lexical Repetition in Texts

研究代表者
渡部　眞一郎（WATANABE SHINICHIRO）
大阪大学・大学院言語文化研究科・教授
研究者番号：90116145

研究成果の概要：
本研究課題の目的は、コーパス・データベースを利用して、言語における「反復」の用法と機能について研究し、明らかにすることである。まず、脚韻という音韻的反復に基づく押韻俗語(rhyming slang)と呼ばれる表現を研究し、その成果を体系的にまとめた。さらに、同一語句の繰り返しである語句反復についてテクストにおける実際の使用例に基づいてその用法と機能を考察した。具体的には、（１）各ジャンルのテクストにおける語句反復の用法に関する特徴を抽出し、その機能について考察した。（２）異なるジャンルのテクストにおける反復の用法の違いを基にして、ジャンル間における語句反復の用法に関する示差的特徴について分析した。（３）英語と日本語のテクストにおける語句反復の使用例とその機能の違いについて考察した。特に、同じ意味内容を伝える翻訳等の複数のテクストの比較により、英語と日本語の言語間での語句反復の用法と機能の違いを考察した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	1,200,000	0	1,200,000
２００７年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２００８年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	660,000	4,060,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・英語学
キーワード：コーパス、テクスト研究、押韻俗語表現、英語文体、音韻反復、語句反復、脚韻

１．研究開始当初の背景
本研究課題の研究代表者は、2001年度より2004年度まで科学研究費補助金（基盤研究(B)(2)）「コンピュータを利用した英語文体論の通史的総合研究」(14100千円)の助成を、研究代表者として受けた。上記研究において、古英語から現代英語に至る英文テクストの通史的総合的なデータベースを構築し、このデータベースを利用することにより、研究代表者および研究分担者4名はそれぞれの専門分野で研究成果を挙げ、その研究成果は2005年5月提出の540ページに及ぶ科学研究実績報告書『コンピュータを利用した英語文体論の通史的総合研究』としてまとめ出版している。今回申請の研究課題は上記研究課題と密接に関連し、これを発展させることをめざしてい

る。以下に本研究課題と密接に関係する研究経過・研究成果について具体的に述べる。
(1)フィンランドのトゥルク大学英語科の研究者との共同による英語論文集 *Approaches to Style and Discourse in English* (Risto Hiltunen・渡部眞一郎編. 大阪大学出版会. 278p. 2004年3月)を本研究代表者がトゥルク大学のヒルトゥネン教授とともに共同編集者として出版した。
(2) 本研究課題の研究代表者は大阪大学言語文化部・大学院言語文化研究科が主催する言語文化共同プロジェクト『ことばと反復』（2002年3月刊行）の研究代表者としてこれを編集した。本研究代表者は英語のロンドン方言に見られる反復要素としての脚韻を用いた修辞法である押韻俗語表現について自ら作成したデータベースに基づいて、その表現の特徴について論じた。さらに、これを発展させて、2002度4月開催の英語コーパス学会において「押韻俗語の特徴」と題して、口頭発表を行い、これをまとめた論文を2003年4月に日本英語コーパス学会誌に発表した。フィンランドのトゥルク大学との共同編集による(1)に記載の論文集において、同表現の研究をさらに発展させた英語論文を発表した。この修辞法に関する本格的な研究は、従来存在していなかったので、先駆的な特色のある研究となったと考えられ、本研究課題に取り組む発端となる研究でもある。

(2)本研究課題の研究代表者は大阪大学言語文化部・大学院言語文化研究科が主催する言語文化共同プロジェクト『ことばと反復2』（2004年5月刊行）の研究代表者としてこれを編集した。この研究をさらに発展させて2004年5月27日より29日まで北欧デンマークのオーフス大学で開催された北欧英語学会の第9回大会（3年ごとに開催される大会）において、"Repetition in English and Japanese Text: A Case Study of How the Proper Name *Jesus* is Repeated"と題し、福音書における反復の用法とその機能について口頭発表を行った。

２．研究の目的

本研究課題の目的はコーパス・データベースを利用して、言語における「反復」の用法と機能について研究することにある。具体的には、音韻的レベルにおける反復要素である脚韻に基づく押韻俗語表現ならびに同一語彙、語句の繰り返しである語句反復についてテクストにおける実際の使用例に基づいて研究する。その際に利用するデータベースの主たるものは2001年度より2004年度まで交付された科学研究費補助金の助成（（基盤研究(B)(2)）「コンピュータを利用した英語文体論の通史的総合研究」研究代表者、渡部眞一郎）による研究によって構築した英語の音韻・語彙・統語・意味を統合的に扱う英語文体論のために構築されたデータベースである。

本研究課題の目的とする(1)音韻レベルの反復の要素である脚韻に基づく押韻俗語表現と(2)語彙・語句レベルにおける反復の研究について、以下に具体的に述べる。
(1) 脚韻という反復の要素が言語表現に直接的に反映している事例として押韻俗語(rhyming slang) と呼ばれる表現を取り上げ、この表現について体系的な研究を行いたい。押韻俗語表現とは 17-8 世紀頃にロンドンで生まれ 19 世紀中頃から広く用いられるようになった俗語表現で、この表現法は、現在でもロンドンのコックニーやオーストラリア、ニュージーランドの方言に見られるが、この表現はもはや地域限定的表現ではなく、近年、各種メディアでも一般的に用いられるようになってきている。

この押韻俗語表現は地域的な単なる俗語ではなく、ひとつの語彙表現体系あるいは修辞法をなしていると言えるものである。近年、聖書を押韻俗語表現で書き換えるという試みがなされたり、英国の映画やテレビ番組では頻繁に押韻俗語表現が用いられている。しかしながら、従来、押韻俗語表現の研究は辞書的あるいは分類的なものしかなく、体系的な研究はまだなされていない。研究者代表者は過去3年に渡ってこの表現法について研究を行い、3篇の論文を書き、その特徴について論じてきた。この研究をさらに発展させて、押韻俗語表現に関する体系的な研究をめざしたい。(1) 音韻的反復である脚韻に基づく押韻俗語表現については、海外の文献として様々な辞書類が存在する。その代表としてGreen, J. *Cassell's Rhyming Slang* (Cassell & Co., London. 2000)や古くはHotten, J.C. *The Slang Dictionary* (Rownam and Little field, New Jersey. Reprint Edition, 1972. originally published in 1859)やPartridge,E. *Dictionary of Slang and Un-conventional English*, Routledge & Kegan Paul, London. 1939)等がある。さらに、インターネットのいくつかのサイトにおいて同表現のリストが盛んに更新されている。本研究課題において、押韻俗語表現の通時的、共時的な研究が可能となるような電子データベースを現在すでに研究者代表者によって一部作成済みのものをさらに大きな規模のものとして、上記の辞書類に基づいて作成する。さらに、種々のテクストに見られる同表現の使用例をこのデータベースに組み込むことによって、特色のあるデータベースとしたい。このデータベースおよびテクストにおける実際の使用例に基づいて、押韻俗語表現の用法について体系的にまとめる。

(2) 種々のジャンルのテクスト（小説、随筆、学術論文、新聞社説等）を取り上げ、これらのテクストにおける語句反復の使用例を分析することによって、その反復の用法と機能を考察する。

まず、反復はテクストの主題を示す指標である。テクストにおいて主題に関わる重要な語句ほどより頻繁に反復される。言い換えれば、一番頻度の高い語句はそのテクストの主題と最も深く関わっている。当然のことながら、その語句は文法で言うところの名詞、動詞や形容詞の内容語であって、冠詞、前置詞、接続詞のような機能語ではない。さらに、反復には２種類あって、ひとつは同一の語句によって同じ内容が反復される同反復ともうひとつは異なる語句によって同じ内容が反復される異反復である。この２種類の反復はジャンルによって、さらには言語文化の違いによってその現れ方が異なる。すなわち、学術論文のようにできるだけ表現上のあいまい性を排除することを良しとするテクストでは、同反復が一般的であるのに対して、随筆などの文章では同反復は修辞的に良しとされず異反復が一般的である。随筆に限らず事実、事件を伝える新聞記事などでも同反復ではなく異反復が使われることの方が多い。ただし、言語文化的な違いによって、同反復と異反復の用いられ方が違う。日本語の文章ではジャンルの違いによる相違はあるものの、概ね同反復が好まれるのに対して、英語の文章では、同反復をできるだけ避けようとする傾向がある。この違いは、たとえば、同反復が多いはずの学術論文においても言える。英米人の書く学術論文ではあいまい性が残らない程度に異反復を使おうという意識が働いているように思えるのに対して、日本人の書く英語の学術論文では、同反復が際立って多い。この点については、印象的感想ではなく、データ分析により客観的に立証することを目的とする。

各ジャンルのテクストにおける反復の様々な使用例を分類整理することによって、各ジャンルのテクストにおける語句反復の用法に関する特徴を抽出し、その機能について考察する。（ⅱ）異なるジャンルのテクストに見られる反復の用法の違いを基にして、ジャンル間における語句反復の用法に関する示差的特徴、および反復の機能の違いについて分析する、さらに、（ⅲ）英語と日本語のテクストにおける語句反復の使用例とその機能の違いについて考察する、特に、同じ意味内容を伝える複数のテクスト（オリジナルテクストの英語翻訳テクストと日本語翻訳テクスト）の比較により、英語と日本語の言語間での語句反復の用法と機能の違いを考察し、明らかにする。

テクストは単なる文の集合ではなく、テクストを構成する様々な要素が有機的に結びついて、なんらかのまとまり(coherence)を作り出している。テクスト研究の枠組みを提供する代表的な論文として、古くはHalliday M.A.K. and R.Hasan, *Cohesion in English*.（Longman, London 1976）の結束性の理論や、テクストを特徴づける指標としての反復の重要性を説く研究である比較的最近の Hoey, M. *Patterns of Lexis in Text* (Oxford University Press,Ox-ford. 1991)の反復の理論が挙げられる。本研究課題では、Hoey（1991）の反復理論の枠組みを利用して、テクストを特徴づける要素としての多様な反復の用法と機能に焦点をあてる。たとえば、代名詞や代動詞などの文法的手段による反復、同一語の反復、類義語、上位概念語による語句反復やテクストを構成する様々なレベル（テーマ、エピソード、場面等）の反復があり、これらがテクスト全体の連続性を作り出している。このうち、本研究課題では、同一語の繰り返しによる語句反復に関する研究が中心となる。この語句反復研究の発端となったのは、本研究者代表者が2004年5月に開催された北欧英語学会（Nordic Association for English Studies）主催の第9回国際大会（デンマーク・オーフス大学）にて“Repetition in English and Japanese Text: A Case Study of How the Proper Name *Jesus* is Repeated″と題した研究成果の口頭発表を行ったことである。その口頭発表において、固有名詞*Jesus*の反復に着目して日本語と英語のテクスト比較を行うことによって固有名詞の反復の用法の違いを示し、その違いがテクストの語りの性質の違いを映すものであることの論証を試みた。この研究は12種類の英語翻訳3種類の日本語翻訳による聖書福音書に基づいて研究者代表者が作成したデータベースに基づく研究であったが、上記大会において大きな支持と関心を集めた。今回の申請が承認されれば、語句反復に関する研究をさらに進めて、これを発展させたい。国外においても、本研究課題の目標とするテクストにおける語句反復の用法と機能に関する研究は特色のある研究であり、この分野に貢献するものとなると考えられる。

３．研究の方法

本研究課題では、言語における「反復」の用法と機能を研究する対象として、音韻レベルにおける反復要素である脚韻に基づき成立している押韻俗語表現、そして語彙・語句に基づく語句反復を取り上げる。以下の研究計画を立てる。

(1)各押韻俗語表現についてより詳細な文法的情報、語源的情報を組み込み、同表現に関するできるだけ多くの文献、辞書を収集す

ることにより押韻俗語表現のコーパス・データベースの完成度を高めたい。もし本申請が承認されれば、押韻俗語表現の発祥の地である連合王国に赴いて本表現に関する情報を収集したいと計画して実施した。

語句反復の研究については、以下の研究計画を立てる。

(2)反復の定義に関わる問題として、ジル・ドゥルーズの『意味の論理学』(法政大学出版局,1987)で対比された反復の二つの原型であるプラトン的反復とニーチェ的反復について考察し、テクストにおける反復の用法と機能を論じるうえでの理論的基盤となる枠組みを考察する。また、ひとつの分析方法として、Hoey, M. *Patterns of Lexis in Text* (Oxford University Press,Oxford.1991.)の反復理論の枠組みで用いられている方法論を採用したい。

(3)テクストの主題を示す指標としての語句反復であろう。一般的に言って、テクストの主題を示す語句が最も頻繁に反復されると考えられるが、語句反復の用いられ方は小説、随筆、学術論文、広告文、新聞社説、演説等、テクストのジャンルによってかなり異なる。これらの異なるジャンルのテクストにおいて語句反復の用法と機能がどのように違うのかについて、多角的に分析する。

(4)英語と日本語のテクストにおける語句反復の使用例とその機能の違いについて着目することによって、英語テクスト一般における語句反復の用法と機能について考察する。具体的には、同じ意味内容を伝える複数のテクスト（オリジナルテクストの英語翻訳テクストと日本語翻訳テクスト、英語テクストとその日本語翻訳、日本語テクストとその英語翻訳等）の比較により、英語と日本語の言語間での語句反復の用法の違いを調べ、その反復の機能の違いについて考察し、明らかにする。

言語における反復の役割は幅広く、奥深いテーマであり、上記の課題と研究方法は多岐に渡る。2006 年度においては、上記の(1)から(4)までの研究計画全体を念頭におきながら、それぞれの課題に取り組んでいくための準備を行う。さらに、個別的には、研究計画の基盤となる上記(1)と(4)で述べた押韻俗語表現と語句反復の両方のデータベースの作成、とりわけ押韻俗語表現については、様々なジャンルのテクストにおける使用例の収集に努める。テクストにおける同表現の実際の使用例については、今まで文献等はなく、多岐に渡る情報を基にして、実際にテクストを丹念に読んでいく必要があるので、2006年度のみならず本研究課題の3年間に渡って行わなければならない。

さらに、語句反復の研究に取り組むためには、既存のコーパス・データベースのみでは充分ではなく、既存のデータベースではあまり扱われることのなかった英文テクスト資料としての学術論文等のジャンルのデータベースの作成が必要となるので、その作成を行う。この作成したデータベースと既存のコーパス・データベースを用いて、小説、随筆、学術論文、新聞社説の各ジャンルのテクストにおける反復の実際の使用例を収集し、ジャンル別に反復の使用例を分類し、その用法について考察、分類整理をする。

４．研究成果

小説、随筆、学術論文、新聞社説といった種々のジャンルのテクストを取り上げ、これらのテクストにおける語句反復の使用例を分析することによって、その反復の用法と機能を考察した。

2006 年度の研究実績としては、

(1)各押韻俗語表現について、より詳細な文法的情報、語源的情報を組み込み、同表現に関するできるだけ多くの文献、辞書を収集することにより押韻俗語表現のコーパス・データベースの完成度を高めている。

(2)語句反復のナラティヴ理論との関わりを聖書の具体例を用いて論じた論文 “Repetition in English and Japanese Text: A case study of how the proper name Jesus is repeated”を刊行した。

2007 年度の研究実績としては

2006 年度に決定した基本的枠組みに基づいて、小説、随筆、学術論文、新聞記事等の異なるジャンルのテクストにおける反復の用法と機能について考察、分類整理を進めた。その研究成果は北欧英語学会第十回(2007 年 5 月 24 日より 5 月 28 までノルウェーのベルゲンにて開催）で口頭発表を行った。とりわけ、2007 年度では、テクストの主題を示す指標としての語句反復の用いられ方について、小説、学術論文、新聞記事等、の異なるジャンルのテクストにける語句反復の用法と機能を多角的な分析を進めてきた。

2008 年度の研究実績としては以下の通りである。

(1)2008年8月26日より10月1日までの間、連合王国のロンドンにて現代口語英語の実際について現地調査を行った。このフィールドワークにより、押韻俗語表現に関する体系的な研究を完成させるための文献では得られない資料を得られ、同表現の使用について研究成果の幅を広げることができた。

（2）小説、随筆、学術論文、新聞社説の各ジャンルのテクストにおける反復の様々な使用例を分類整理してきたが、この実績に基づいて各ジャンルのテクストにおける語句反復の用法に関する特徴を抽出し、その機能について考察した。

(3) 異なるジャンルのテクストに見られる反復の用法の違いを基にして、ジャンル間における語句反復の用法に関する示差的特徴、および反復の機能の違いについて分析した。
(4) 英語と日本語のテクストにおける語句反復の使用例とその機能の違いについて考察した。特に、同じ意味内容を伝える複数のテクスト（オリジナルテクストの英語翻訳テクストと日本語翻訳テクスト）の比較により、英語と日本語の言語間での語句反復の用法と機能の違いを考察した。

以下、具体的に研究成果を報告したい。
渡部(2008)においては、二種類の反復、同反復と異反復の機能と用法について論じた。まず、同反復の機能のひとつがテクストの主題の指標となることである点に注目して言語学の学術論文をテクスト資料として、分析を行った結果を示し、同反復と主題の関わりについて論じた。

Watanabe(2008)において発表した研究内容は、聖書の伝統的な英語訳と日本語訳の最も顕著な違いのひとつとしマタイ、マルコ、ヨハネ、ルカの４福音書における“Jesus”と「イエス」という固有名詞の反復の頻度に違いがあることを示した。同じ物語内容を伝えているという意味においては、イエスを対象とする指示の総体反復はほぼ同等であるはずであるが、固有名詞の同反復に限れば日英語訳では大きな違いがある。３種類の日本語訳聖書のいずれにおいても４つの福音書において固有名詞「イエス」が 1400 回以上出現するのに対して、欽定訳聖書をはじめとする伝統的な英語版聖書ではいずれも“Jesus”の出現は600回程度と日本語版聖書と比べて半分以下の頻度である。このことは英語では代名詞が多用されるのに対して日本語ではイエスを指示する代名詞を用いることがないという文法的な要因によるのみならず、先に述べた言語文化的な要因が関与している、さらには伝統的な英語版聖書の客観的なナレーターに対して日本語版聖書のナレーターがイエスをナラティヴ理論で言うところのfocalizerとしてイエスの視点から語っているという福音書のナラティヴのあり方が日本語版と英語版では非常に異なっているからではないかと考えられる。この聖書の例が示すように同反復のあり方の相違は様々な要因によるものである。

Watanabe(2009)では、異反復について論じている。異反復に関しては、これは単なる修辞的技巧とその効果というだけではなく、それ以外の然るべき目的を実現するために用いられる場合がある。たとえば、小説における主要な登場人物の名前は固有名詞、代名詞、種々の普通名詞で表される異反復であるが、この登場人物の様々な名前あるいは呼称(appellations, naming)のあり方は物語のプロットと密接に関わっている場合がある。チャールズ・ディケンズの初期小説 *Oliver Twist* を例にとると、悪漢 Fagin の一味に Nancy という売春婦と思しき女性がでてくるが、この人物は物語の展開のうえで非常に重要な役割を果たす。Nancy は Fagin の言いつけで、彼のもとを去った Oliver を連れ戻すが、これを後悔し、自分のような身の舞に Oliver をならせまいと決意し、Oliver を救おうとして、結局犠牲となるあわれな人物である。*Oliver Twist* では善と悪のせめぎあいと善なるものの勝利がこの小説のひとつのテーマであり、登場人物における善と悪の対比は明確である。Nancy が唯一悪の世界から善の世界へと足を踏み入れた登場人物であり、善の勝利は Nancy の犠牲のうえに成立したとさえ言える。

さて、Nancy の呼称の異反復がどのように物語と関係しているかというのが重要な点である。Nancy は娼婦のときは“young lady”という呼称で指示されるが、Oliver を Fagin のもとに連れ戻すときには変装して“young woman”となり、悔い改めた後には“the girl”という呼称で指示されている。つまり、Nancy の呼称の推移は変装という中間段階を経て Nancy の悪の世界から善の世界へ移る変化に呼応している。これは、登場人物の呼称の変化が物語の展開と深く結びついている典型的な例であることを論証した。

異反復は同じ表現を繰り返さないための修辞的な手段として捉えられていることが多いが、小説などにみられる異反復は修辞的なだけでなく、いろいろな効果を意図して用いられていると考えられる。たとえば、*Oliver Twist* のスリ一味のボスである Fagin は物語のなかで Fagin という固有名詞で指示されるのが 306 回であるのに対してそれよりも多い 311 回“the Jew”という語で指示される。*Oliver Twist* における“the Jew”という表現は 5 度だけ Fagin 以外の人物、仲間の Barnie や古着屋の男を指示するために用いられているが、Fagin = the Jew という図式は *Oliver Twist* では確立している。Fagin が手下の若いスリたちから巻き上げたものを大事に宝箱にしまい、それをひとりこっそり見てほくそ笑んでいる狡猾な人物像がこの“the Jew”の反復によって効果的に浮かび上がってくる。それは、この反復によって「狡猾なユダヤ人」の典型である高利貸しシャイロックを読者に思い起こさせるからであろう。

Oliver Twist における最も印象深い人物である Nancy の場合は、彼女を指示する表現が物語の進展とともに推移する。下の図は Nancy の 9 章から 15 章までの物語の進行につれてどのように指示されたかをしめしている。9 章で Nancy は初めて物語に登場するが、

その時は“a couple of young ladies″という表現で“lady″という語で指示される。Nancy が 13 章で再び登場したときも“the lady″と指示されている。その同じ章で Fagin に命じられて“young woman″にみせかけるための変装、頭には“a straw bonnet”ガウンに白いエプロンをまとった服装で町にでかけて Oliver を連れ戻すことになるのだが、町にでた Nancy は“the agonized young woman″(13 章) とか“the young woman″(15 章) と指示される。

Nancy が首尾よく Oliver を Fagin のもとに連れ戻した 16 章では、突如 Nancy は自分の罪深い人生を嘆き、Oliver を悪の世界へ連れ戻したことを後悔する。この 16 章から Nancy を指示する語句が“the girl″となっていく。19 章で Nancy を指示する“the young lady″が 2 例見られるが、16 章から 46 章に至るまで Nancy は常に“the girl″という語で指示される。“the girl″という語句は小説全体で 194 回頻出するが、16 章以降は Nancy を指示する“the girl″が 182 回もあり、Nancy = “the girl″という図式が確立している。ただし、唯一 39 章で一見するとひとつの例外と思われる箇所、“Sikes is waiting for his young lady [Nancy]”があるが、これは Nancy の相方の Sikes の意識のなかでは、Nancy はまだ自分の女だと思っていることを示していると解釈するのが自然である。表 6 は 16 章から 46 章までの Nancy を指示する語句″the girl″の頻度数を表したものである。

図 1　Nancy を指示する語句の推移

young lady	⟶	young woman	⟶	the girl
娼婦 Nancy		変装の Nancy		変身した Nancy

登場人物の指示のされ方の変化はその人物のなんらかの変化を表すという意味で重要な意味合いをもつことがある。まさに、このことが *Oliver Twist* における Nancy の場合にあてはまる。Nancy の指示語の推移と彼女の変身は小説のテーマでもある「善の勝利」に導くという意味で重要である。

Nancy は娼婦のときは“young lady″という呼称で指示されるが、Oliver を Fagin のもとに連れ戻すときには変装して“young woman″となり、悔い改めた後には“the girl″という呼称で指示されている。つまり、Nancy の呼称の推移は変装という中間段階を経て Nancy の悪の世界から善の世界へ移る変化に呼応している。

これは、登場人物の指示語の変化（異反復）が物語の展開と深く結びついている典型的な例であると言えよう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３件）

(1) 渡部眞一郎“*Gentleman* in *Oliver Twist*: A Linguistic Approach to Literature”Watanabe, Shinichiro and Y. Hosoya eds. *English Philology and Corpus Studies,* pp. 259-272, Shohakusha, 2009.

(2) 渡部眞一郎 “Repetition in English and Japanese Text: A Case Study of How the Proper Name ‘Jesus’ is Repeated” Proceedings of the Ninth Nordic Conference for English Studies (Online version) Edited by Tim Caudery, pp. 1-10, 2008. http://www.hum.au.dk/engelsk/naes2004/proceedings/toc.html

(3) 渡部眞一郎「テクストにおける二種類の反復」大阪大学大学院言語文化研究科『ことばと反復 3』、45-54 2008.

〔学会発表〕（計　１件）

渡部眞一郎“Repetition and the Theme of a Novel: A case study: Dickens’s *Oliver Twist*” The Tenth Nordic Conference for English Studies, Bergen, Norway. May 25, 2007.

〔図書〕（計　１件）

編著書　渡部眞一郎（細谷行輝との共編）*English Philology and Corpus Studies,* 568 ページ, Shohakusha, 2009.

６．研究組織
(1)研究代表者

渡部　眞一郎(WATANABE SHINICHIRO)
大阪大学・大学院言語文化研究科・教授
研究者番号：90116145

(2)研究分担者
無

(3)連携研究者
無